

# 「オツベルと象」「セロひきのゴーシュ」異読 —「白象のさびしいわらい」と「ゴーシュのつぶやき」—

高 橋 直 美\*

## 一、白象のさびしいわらい

従来、「オツベルと象」は、資本主義搾取社会に対する労働者の勝利と読まれている。しかし、賢治自身、社会主義を肯定しているわけではないし、資本主義を否定しているわけでもない。この作品においても冒頭で「オツベルときたら大したもんだ。」と牛飼いに言わせている。

この牛飼いは拝金主義で、外見でしか判断できない人物としては書かれていない。ごく一般的で善良な人間として登場している。

オツベルという人物は、一般社会においては事業成功者の部類に入る。近代資本主義社会においては成功者、経済的には小規模ながら一応英雄的であると言えよう。

これに対して、白象はといえば、純粹無垢な善意の固まり、例えば、「虔十公園林」の虔十同様の、「デクノボー」的存在である。

しかし現実として、この「デクノボー」タイプは近代社会においては世間知らずで人に騙されやすいと言える。興味本位でオツベルの工場にやって来て、百姓に怖がられているのも気にせずに入っていく。要するにオツベルと白象とは、文明開化によって日本にもたらされた産業革命以降の成功者と、民話や説話等に登場する気のいい山の神(山男等、山の神を賢治流に擬人化したもの)という取り合わせなのである。

そして、そこには当然の如く「近代」と「古代」が接触した「世界観の歪み」を生じたのである。これが無意識のうちに悲劇を起こした原因となってしまう。

賢治自身の生き方を見てみると、精神的には「デクノボー」という反近代的な存在を目指しながらも、一方では、農村救済のために最新の近代科学を駆使するという二面性を内包していた。農村の発展、農民の生活向上には農業の近代化、近代文化の導入が必要であり、オツベルの生き方自体を悪として責めるわけにはいかない。農村改革には農業の機械化も利潤も必要不可欠なものだからである。しかも、家長制度により次男以下の離農が増え、結局はオツベルのような資本家の工場で働かなくては生活ができない。工場労働者という職種は、農家の被相続人には生活の拠り所なのである。稗貫農学校(花巻農学校)での賢治の教え子の多くもまた、家の事情のため、賢治先生の期待にそえず離農していったのである。

---

\*東洋大学国際地域学部; Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

白象は、菩薩道の実践者、純粋な信仰・清らかな祈りに満ちあふれ、何があっても人を恨まない「デクノボー」的な存在である。そして、労働を喜びに昇華させるという「農民芸術概論綱要」の体現者のようでもある。

このような白象が自らの意思で、オツベルの工場に行ったのである。その行為に端を発したこの物語を搾取被搾取の問題でかたづけようとしたら、白象はお人好しの間抜けな象でしかない。しかし、この白象は、一生懸命に仕事をしているオツベルや百姓の役に立てることが何よりも嬉しかったのだ。働く喜び、人の役に立つ喜びがこの白象の信念であり、全てなのである。

ゆえに、自らの力尽きて仲間に助けを求め、全てを破壊することになってしまった白象は「さびしく」微笑むしかなかったのである。そこには、神聖な白象の仲間に瞋恚を生じさせ、遂には、工場の破壊、オツベルの圧死という悪業をつくらせてしまう。

この白象の「さびしい微笑み」には、自分では一生懸命人の幸福のために尽くしたつもりが、いつの間にか、周囲に災いをもたらしてしまった、そのさびしさなのである。白象はオツベルを恨んではいない。しかも、周囲を犠牲にして自分だけ助かったことに対して当然の如く後悔しているのである。

白象は古くから仏教と深い因縁を持った動物である。六つの牙を持つ白象は法華経普賢菩薩勧発品に普賢菩薩の乗物として登場する神聖な清浄な生き物である。仏教では成仏の因として「清浄」を絶対とする。白は清浄の証なのである。ところが、一匹の無責任な白象のために仲間の白象が「怒りで黒くなって」押し寄せ、工場を破壊しオツベルを踏み殺してしまう。「怒り・暴力」は仏教では禁忌であり、墮地獄への道となる。ゆえに、この白象は自分の失敗を救うため仲間に悪業を背負わせたことになる。

賢治が実践してきた法華経の修行は「柔和忍辱」である。どれほど罵詈雑言されようが杖木瓦石で打たれようが怒りを生ぜず、相手の成仏を説き、成仏の因である毒鼓の縁を結ぶ。これが常不軽菩薩の振る舞いである。この常不軽菩薩に試練を与える上慢の四衆は「瞋恚」に満ち悪道に堕ちて行く。白象も仲間にこの「瞋恚」を生じさせてしまった。この「瞋恚」「詭曲」は賢治の恐れた「修羅」の特性でもある。

しかも、純粋無垢の聖なる色・白は、一度黒く染まってしまうと元に戻すのは至難もわざである。しかも、仲間の白象達はオツベルを踏み殺している。殺生与奪は重罪である。オツベルも白象の出現により思わぬ拾い物をしたと思い、欲に目が眩んでしまう。すべては、よかれと思ってした白象が引き金になった悲劇なのである。ゆえに、オツベルも初めから白象を騙す気はなかった。最初は恐怖さえ感じていたのである。ただ、オツベルは人間社会の構成員であるから、象を家畜としか見られない。家畜は飼い主のものであり、生かそうが殺そうが食べようが、動物自身には選択権はない。しかし、白象は一個の人格者として自認している。ここに世界観の違いがある。労使の対決よりも、生物・生命の貴賤の問題の方が大きいのだ。

オツベルにしてみれば、白象が自分から働きたいとって契約が出来たのである。白象が浅はかだったと反論するであろうし、現代社会においてはオツベルの言い分は一応筋を通してはいる。

この物語ではオツベルは確かに強欲な資本家である。しかし、資本主義社会においては経費削減効率アップは最高の状態である。ゆえに、オツベルは資本家として当然の行為をしたまでであり、彼の理念の中では白象に労働は成功なのである。しかも、白象は自分からやって来た。オツベルが強制収容したわけではない。しかも、人間社会においては家で世話をする動物は家畜として所有権は飼い主にあるのだ。となると、結局悪人は誰も居ない。反対にいとえば、皆が悪人なのである。

確かにオツベルは白象を酷使したが、果して白象はオツベルが制裁を受けることを望んだであろうか。答えは否である。白象はあくまでも白象であり、善を求める心にはかわりがないからである。しかし、この事件により、結局はオツベルも白象も仲間も全て元の求道には戻れなくなってしまったのである。このことが「オツベルと象」の最大の悲劇なのである。

また、賢治という作家は説教じみた話が嫌いであるが、その中にも寓話は存在する。

オツベルは最初白象に恐怖を抱いていた。神聖で大きく、未知の存在だからである。しかし、その実態を知ってしまったからは、オツベルの白象に対する態度が変化する。それまで手の届かない神聖なものが地に落ちてしまうと、崇拜は一転して侮蔑になる。白象がその良い例である。価値というものはその時その時で変化する。もちろん、法華経でいう一念三千の法則だからである。

賢治の作品にも、その当時は理解されなくても後年その行為の偉大さが証明されるという話がある。「虔十公園林」の虔十がそうである。ある日、虔十は急に杉を植えた。そして主いいに理解されないまま死去したのだが、虔十の植えた杉の木は死後大分経ってからその偉大な価値が理解された。

白象の行為、白象に対するオツベルの行為も同様である。実際、オツベルに対する牛飼いの評価は常に良好なのである。ゆえに、オツベルの話を尊敬を以て話している。これは牛飼いが拝金主義者だからでも何でもなく、要するにその人にとってその時はそうだっただけである。しかし、時が流れ全てが無私に見渡せる状態にある読者になれば、物語は人それぞれの違った見方ができるのである。作品を語る牛飼いは白象を家畜と見なしているから白象の徳性は見えない。反対に、善悪という観点から読むから読者にはオツベルが強欲の悪徳資本家に映る。

だから、賢治は物事の善悪をあえて言わないのである。善悪の判断や徳性というものは、押しつけるものではなく、個人の境涯によって決まるものだからである。

賢治は「雨ニモマケズ」で非己智分（己の智分に非ず）を説いている。人知では計り知れない仏智を敬っているのである。この「オツベルと象」も、それぞれの分際というものを見つめているのである。人は非己智分をわきまえないと暴走してしまう。己が分際というものは、良きにつけ悪きにつけきちんと弁えなければいけないのである。農民救済を目指し、精根尽きるまで奉仕し尽くした賢治であるが、病気になる死を目前にしたときその満足心が「慢」であることに気付いた。そして、自己の慢心を懺悔し、非己智分に目覚めたのである。

賢治という人は、どんな罪を犯した人でも決して責めることはなかった。自分に関係する何かが起こった場合は、他の非ではなく自分の無力を責めるような人であった。そのような賢治であるから、白象の寂しい笑いを、自ら招いた災いから辛うじて助かった心を表しているという解釈では底

が浅いのではないだろうか。これは、白象という存在を軽んじることであり、賢治の求める菩薩道の実践が非現実的であることを自ら証明することに等しい。賢治は白象を通して、求道の難しさ、厳しさを示しているのである。

## 二、「セロひきのゴーシュ」……ゴーシュのカッコウに対する思い……

これも人間と動物とが織りなす物語であるが、「オツベルと象」とは全く違う。

ゴーシュは自分を慕ってやって来る動物達を「たかが動物（鳥）如きが」と初めから小馬鹿にして対応する。しかし、実際にはゴーシュはこれらの動物たちに真の音楽を教えられることになるのである。しかし、皮肉なことにそれは仲間の人間たちと自分の違いが分かった時に本当に気が付くのである。

賢治の童話には、このように人間以外の生き物が「まこと」や真の優しさと強さ、「生」というものの本質を知っている話が多く存在する。「セロひきのゴーシュ」はその代表作の一つである。

ゴーシュは町の活動写真館でセロをひく係である。しかし、楽手の中でも一番下手でいつも楽長に苛められていた。しかし、本当は苛められていたのではなく、指導ということで叱られていたにすぎない。しかし、ゴーシュのひねくれた感情はどうしても真実や責任感から逃避してしまう。

本文中、ゴーシュが楽長に注意を受ける場面がある。「セロがおくれた」「セロっ、糸が合わない。困るなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてまでいるひまはないんだがなあ。」「おいゴーシュ君。君には困るんだがなあ。表情ということがまるでできていない。怒るも喜ぶも感情というものがさっぱり出ないんだ。それにどうしてもぴたっと外の楽器と合わないもなあ。いつでもきみだけとけた靴のひもを引きずってみんなのあとをついてあるくようなんだ」

これらの部分はゴーシュの欠点を楽長が指摘しているのだが、実はこの部分が動物たちとのやり取りの伏せ線になってくる。ただゴーシュの下手さ加減を述べているわけではない。これらの難点がなおれば、ゴーシュは立派なセロひきなのである。

ゴーシュの背負った運命の重さは楽長の指摘のみではもちろんない。「その晩遅くゴーシュは何か巨きな黒いものをしょってじぶんの家へ帰ってきました。」この黒い巨きなものとはもちろんゴーシュのセロである。セロを担っているゴーシュの責任の重さがこのような形容となって現れているのだ。その晩、ゴーシュの家に猫がやって来る。この猫は一見ゴーシュを馬鹿にしにきたように見えるのだが、そうではない。「怒るも喜ぶも感情というものがない」ゴーシュに、怒りを込めた演奏をさせてくれたのだった。このためゴーシュの重荷は少し軽くなり、「次の晩もゴーシュがまた黒いセロの包みをかついで帰って来ました。」という「巨きな」が抜けた描写となる。そして、二日目はかっこうやって来てドレミファを正式にやりたいという。ドレミファ音楽の基礎であり、ゴーシュの基礎から出来ていないものであった。初めは馬鹿にしていたゴーシュも次第に真剣になってくる。かっこうはここで、正しいドレミファとは何かをゴーシュに教えている。これは単なる音階の話ではない。かっこうが「わたしらのなかまならかっこうと一万いえば一万みんなちがうんです。」という。これは仏教で言えば「一念三千」の法則を言っているのだ。念々に心の動きが生じ、一秒たり

とも同じ状態ではない。だから、心が音声として現れる「かっこう」という鳴き声もすべて変わってくるというのである。しかし、仏教では「仏界」という境地に如何に長く留まれるかが修行の目的である。かっこうの「正確なドレミファ」というのはこの仏の境涯を言っているのである。どうにしたら即身成仏ができるのか、菩薩道を如何に真剣に行じるかをのべているのである。だから、かっこうのやり取りは真剣であり、ゴーシュをして「これは鳥のほうがほんとうのドレミファにはまっているかなという気がしてきました。どうも弾けば弾くほどかっこうの方がいいような気がするのです。」と思わせることになる。しかし、ここでのゴーシュはまだ修行を始めたばかりであり、たかが鳥如きにという傲慢さによってかっこうを拒否してしまう。修行というものはどんな状況であっても決して投げてはいけない。真実を求めるということの難しさをかっこうは「ぼくらならどんな意気地のないやつでものどから血が出るまで叫ぶんですよ。」という。かっこうには「驕慢・見栄」はない。けれども、ゴーシュには人間という特権意識がある。この特権意識のためにここでもまだ優しさが表に現れない。かっこうの純粹で真摯な精進に対する妬みがゴーシュの修行の邪魔をしているのである。かっこうは共に真実を目指すべく精進を積む同志としてゴーシュをみていた。しかし、ゴーシュは挫折し反対にかっこうに瞋恚を抱いてしまった。そこで、かっこうは単身で真実を求めることを決意し、ガラス窓に体当たりしながら東の空に真っ直ぐに飛び去ってしまったのである。東には法華經の東方淨瑠璃淨土があるとされている。(西は浄土教の西方十万億土の阿弥陀如来の淨土がある)

次の晩は狸の子供が来る。ゴーシュは困りながらも子狸に対して笑ったり、感心したりしながら相手を認めることができるようになった。オーケストラは和して初めて曲になる。ソロではないのだ。相手を認め、相手と共に曲をつくらなければならない。しかも、子狸はゴーシュの最大の欠点である音の遅れを正確に指摘する。はっと気が付いたゴーシュに対して、子狸はその原因を追求しようと一生懸命に努力する。しかも、その二番目の糸の遅れは、かっこうとの合奏の時から気が付いていたのだった。

夜が明けて子狸が帰ってしまうと、「ゴーシュはほんやりとしばらくゆうべのこわれたガラスからはいつてくる風を吸ってい」た。この時、ゴーシュは何を思っていたのであろうか。

次の晩は、ほんの僅かなノックの音を聞き逃さずにドアを開けるゴーシュ。するとすると、今度は母ねずみの子ねずみの病気を治してくれという。一瞬ムツとするゴーシュだが、自分のセロが動物たちの病気を治していると知り、びっくりする。ここで、ゴーシュはセロは自分だけのために弾くものではないことを感じる。自分がセロを弾くということは一種の救済事業である、言い換えれば、社会のためであることを何となく認識する。子ねずみのためゴーシュは「何とかラブソディ」とい曲を弾く。初めて他人の幸福を願って弾いたのである。すると、それまで、動物に対して優しさを見せなかったゴーシュが、パンをねずみの親子に与えるという行動にでる。それから、五日間、ゴーシュは練習に練習を重ねて本番に望んだ。

演奏が終わって楽屋に帰ってくると、楽長からアンコールに答えて何か演奏するように言われる。自分は下手だと思ひ込んでいるゴーシュは、楽長の意地悪だと思ひ、馬鹿にされた腹立たしさから、

猫に弾いてやった「印度の虎狩」を怒った象のような勢いで弾きはじめる。ゴーシュの頭のなかにはあの時の猫の表情が如実に浮かんでくる。

賢治は音楽を聞くと、そのメロディが視覚として現れたという。この場合のゴーシュはその反対であるが、実体験としての感情の変化が如実に表現されている筈である。この時のゴーシュは初めの部分で楽長に指摘された欠点を全てクリアしたのみならず、感情移入という点から他の楽手より秀でているといっても過言ではないだろう。しかも、終わるとすぐに、その曲の殊勲者であった猫のように素早く引っ込んでしまった。楽屋に戻り、初めてゴーシュは自分が立派なセロ弾きになったことを知る。不振な表情のゴーシュに楽長は「体が丈夫だからできたんだ」という。

一般に死を目前にした賢治が自らの状況とダブらせて「健康」を強調したとされている。しかし、それだけではこれほどの力を得られない。確かに不眠不休による練習の成果であろうが、重要なことは「真実」を追求しようとする姿勢である。法華経で如来寿量品に説かれている「一心欲見仏 不自惜身命」の姿勢である。大きな黒い宿命を乗り越え、道を求めて真っ直ぐに進む、その振る舞いに真実があるのだ。

賢治の信奉した日蓮は「崇峻天皇御書」で「一代の肝心は法華経・法華経の修行の肝心は不軽品にて候ない、不軽菩薩の人を敬いしは・いかなる事ぞ教主釈尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ、穴賢・穴賢、賢きを人と云ひはかなきを畜いふ」と説いている。丈夫な体は「雨ニモマケズ」にも記されているが、それはあくまでも修行を行うための要素に過ぎない。

昭和八年九月十一日 柳原昌悦宛書簡に「私のかういふ惨めな失敗はたゞもう今日の時代一般の巨きな病「慢」といふものの一支流に誤つて身を加へたことに原因します。」「人を怒り世間を憤りて師友と失ひ、憂悶病を得」たと記している。死の数日前まで推敲を続けたというこの作品は、「求道」の厳しさや難しさを実感した賢治自身の現実の姿だったのかもしれない。賢治自身、自らの失敗は自らの「慢」によると断言している。「慢」により身体が病み、仕事も中途半端で終わってしまった。このような自分の人生を振り返った時、全ての事象が自分の成仏（幸福）を得るための過程であったことを悟った。賢治の晩年はこれまでの謗法罪障消滅の祈りになった。

ゴーシュの慢心は動物たちとの交渉を通して浄化されていった。ゴーシュのセロ上達は、彼の間性の浄化に伴って現れた一現象に過ぎず、大切なのはその過程なのである。ゆえに、見違えるような自己の上達ぶりも人々の称讃もゴーシュにとってはどうでもいいことになってしまう。賢治の「慢」は人によく思われたい、有名になりたということから起こったものであるからだ。

そして、自らの道を見据えたゴーシュは、求道に命を懸けて精進し続けたかっこうに対して、「あかっこう。あのときはすまなかったなあ。おれは怒ったんじゃないかかったんだ。」と初めて心を開いて感慨深く追想した。賢治の目指した道はあまりに遠かった。しかも、死を目前にした賢治には為す術がない。かっこうのように一目散に駆け抜けていけないのである。賢治のその悲しさはゴーシュの目を通して、かっこうの飛び去った空を眺める行為として現れている。そしてそこには、死を目前にした賢治が今生を振り返り、来し方に思いを馳せた感慨の深さ、後悔とは異なる生の悲しみというべき悲哀が透明な風となってかっこうの去った遠くの空に流れて行くのである。



賢治がその晩年において特に信奉した常不輕菩薩品の肝心は、「時に諸の四衆は 法に計著めり 不輕菩薩は その所に往到りて これに語り言わく われ汝等を輕しめず 汝等は道を行じて 皆當に仏と作るべければなり」と。諸人は聞き已りて 輕め毀り罵詈れども 不輕菩薩は 能くこれを忍受せり。その罪、畢え已りて 命終の時に臨み この經を聞くことをえて 六根清淨なり。」である。しかも、「時の四部の衆の 著法の者にして 不輕の「汝は當に仏と作るべし」と言えるを聞きしものはこの因縁をもって 無数の仏に値いたてまつる。」と、不輕菩薩を馬鹿にして苛めた者も菩薩の因縁により成仏できると説かれている。

ゴーシュにとって、動物たちとのやり取りはまさに不輕菩薩の行であったのではないか。そして、ゴーシュがその「慢」を捨てた時、彼の求めていた音楽の神髓を得ることができたのである。

しかし、その手掛かりを掴んだゴーシュは、修行＝求道の厳しさ・奥深さを見せつけられ、見違えるほどの上達ぶりさえ眼中にはなくなってしまった。なぜなら、ゴーシュの求道は今始まったばかりであり、これから進むべき道の容易でないこと、孤独であることを知らず知らずのうちに感じたからである。

「セロひきのゴーシュ」は決してハッピーエンドではない。人々の喝采を浴び、楽長から称讃を得てもゴーシュは歓喜しない。なぜなら、求めるべき道のりの余りに遠く厳しいことを知ってしまったからである。そして、ゴーシュは自分の先達である、カッコウへと思いを馳せ、遠い空を眺めたのである。

#### 参考文献

「法華經」(岩波文庫 坂本幸男他)

Reading two tales, *Obbel and an Elephant* and  
*Goosh the Chellist* by Kenji Miyazawa

Naomi TAKAHASHI

Reading is an activity which reflects a reader's state of mind strongly. In the preface to *Spring and Shura*, Miyazawa says that the readers' opinion changes as time goes on and differs naturally each by each. From this point of view, Miyazawa doesn't distinguish evil from good nor promote morality in his tales.

All that I can say after reading *Obbel and an Elephant* is, this tale is a tragedy in which both Obbel and the elephant lost their own goal because of failing to find the truth. *Goosh the Chellist* is also an unhappily ending tale which describes the difficulty and the loneliness of seeking the truth.